

走れエロス？

こうじ

「メロスはぶらぶら歩き出した！」

このセリフは、小学生だった僕が、学芸会の『走れメロス』のコール隊というエキストラの様な役で、舞台下に並べられた壇上の上で叫んだ言葉だ。当時、不登校児だった僕は、なぜかこの舞台には興味を示し、この時期は真面目に登校して、冒頭の一節を、朝のトイレの中で痛むお腹をさすりながら練習していた。コール隊の役目を終え放心状態になった僕は、舞台上でセリヌンティウスが待つ処刑場へと走るシーンを必死に熱演する、優等生のK君をみつめていた。すると知るか知らずか、徐々にK君の衣装がはだけて、片乳が出てしまった。それでもK君の熱演は続く。小学生にしては黒ずんだ乳首。。
優等生は乳首まで優等生なのか？
そんな自問自答をしていた最中、同級生の中でも少しませたT君が、小声で僕にぼそりと呟いた。

「走れエロスだな……」

『影響を与えた一冊』という事で、学生時代の記憶を遡ってみた。だが、そもそも本を開いた記憶というのがない。無論、教科書も。こう書くと頭が良い様に聴こえるが、通信簿は、オール1か2の、生粋のバカである。
そんな僕が、学芸会の『走れメロス』にだけは興味を示し、教科書の巻末の太宰の写真だけは、克明に記憶している。普段は国語の時間に感銘などしない同級生を尻目に、当時の僕は、幼心にも直感的に、この男の物語は、『偽物』だと、何度も自分の心に言い聞かせ

ていた。

今回、初めてエッセイというものを書いてみた。正直、太宰治はハードルが高過ぎた。

『走れメロス』しか読んでなかった僕は、太宰治の著名な作品を読んでみた。そして感想は、やはり僕のオツムでは、この文豪の文体を把握するには、あと二十年は必要だと思った。それと同時に、幼心に感じた『偽物』という感覚が甦ってきた。

議員の父と病弱な母の下、津軽屈指の大地主の富豪の六男坊として生まれ、総ヒバ作りの豪壮な家で、三十人もの使用人に囲まれて育った太宰治。だがその生家が、新興成金であると知った時、繊細な太宰は葛藤し、『人間失格』を描くまでの波乱に富んだ人生行路を歩む事となる。

太宰は、二十三歳の時に遺書となる『晩年』を描き、四十歳を待たずして、心中している正に、波乱の人生。僕の人生もこれまで、なかなか波乱だった様に思う。。

なんと言っても、母が自殺をした事だろうか急に打ち明け話の様な事を書いてしまったがこれをコンテストの売りにしようとしている訳ではない。ならなぜ、こんな事を書いたかという。太宰治は自殺ではなく、『病氣』だったと、思ったからである。

僕の母は重度の鬱病であった。離婚をして、銀座のクラブでママとして働き、色々な事をして……。正に、『人間失格』の様な人生を送った人だった。そんな母の息吹が、太宰治の小説を読み進めるうちに甦ってきたのだ。太宰と僕の母とがリンクする部分。。それは、「不器用」という三文字だ。

昭和の文豪に対して、「不器用」と言うのは全く恐れ多いが、率直に感じた感想だ。

『走れメロス』を読み返してみて、メロスは自分に似ていると思った。馬鹿正直で、他人の不純な言動には潔癖で、その割にはどこか抜けていて。たまに思い出したかの様に、愛やら真実やらを叫んで周りを巻き込んで、気付いた時には、真っ裸の心をみんなの前で曝け出している。

全くもって、付き合いにくい男である。

だからこそ、誰よりも心のメロスを無意識にも自覚していた僕は、他人を無闇に巻き込まない様に、『偽者』を演じ、一人、走り続けてきたのかもしれない。

年間自殺者、三万人という数字は、十年前から変わっていない。自殺には様々な理由があるが、大抵は脳の『病気』だと、僕は思っている。そうでなければ、正気の状態で自らの命を絶つ事など、とてもじゃないが出来るものではない。だからこそ、本当は太宰も、僕の母も、メロスの様に、『生きる』事を、誰よりも心の奥底で望んでいたのだと思う。

あれから24年経った。僕も36歳だ。

『走れエロス』だなど、名言を言ったT君はその特性を生かし？ AV業界に進んだ。そして昨年、めでたく結婚した。昨夜、T君が制作したAVを素っ裸で鑑賞した。『走れエロス』だなど、T君が僕に言ったセリフは、そのまま僕への予言になったようだ。。

僕はまだ、『偽者』のまま、走り続けるだろう。生き狂い、すべてを愛せなくなったとしても、心にメロスを抱いたまま、太宰さんと母が安住する、天国のゴールを目指して。。

さあ、行こう。 日が沈まぬうちに。

走れ！ エロス？（笑）